

2022年1月30日（顕現後第4主日、C年）牧師メッセージ

「み言葉に自らを合わせる」

（ルカによる福音書4：21-32）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスは、故郷ナザレの会堂でイザヤ書を朗読し、このイザヤの預言は「今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話しました。はじめ、人々は力強く語る主イエスを褒め、「この人はヨセフの子ではないか」と驚きます。人々の心には、主イエスを同郷の英雄として誇る人間的な思いがありました。彼らは同郷人イエスを誇ることで、自分たちを不必要に高めようとしているのです。この人々は自分たちを特権集団だと思い込むことで、結局は主イエスのことを自分たちのところまで引きずり下ろし、人間的な関わりの中でのみ、主イエスを見えています。

これに対して主イエスは、「医者よ、自分自身を治せ」ということわざを引いて、人々の不順な思いを明らかにします。人々は、医者がまず自分を癒すべきであるのと同じように、主イエスが身内である自分たちに特別な恵みを与えることを期待しています。しかし、このような彼らの思いは神の恵みを自分たちだけのものにしようと、内へ内へと向かい、神のみ心からは離れています。かつて、エリヤもエリシャも「身内」ではなく、異邦の地へと遣わされました。なぜなら、神はすべての人の救いを望むからです。それゆえに預言者を「外」へと遣わすのです。この預言者たちを拒んだかつてのイスラエルの民と同じように、神のみ心に従ってすべての人への救いをもたらす主イエスを、人々は拒みます。故郷との関わりにとらわれること無く、神に従う主イエスは、彼らからは異質な者として排除されるのです。怒りに満ちた人々は、なんと主イエスを崖から突き落とそうとします。しかし、主イエスは彼らの間をすり抜けて立ち去ってしまいます。主イエスのこの姿は神のみ言葉を表します。人々が受け入れることを拒否したみ言葉は、人々からすり抜けて離れ、「外」に向かって出ていってしまうのです。

せっかく神のみ言葉を聴き、感銘を受けたにもかかわらず、人々はそれまでの自分のあり方に固執したために、み言葉が離れていってしまいました。すべての人の救いを望む神のみ言葉は、外へと向かっていく力に満ちていて、内に閉じ込めることはできません。そのみ言葉を自分に合わせようとするのではなく、み言葉に自らを合わせて生きようとするなら、その人は古いあり方から解放され、神のみ言葉と共に新しい世界へ出て行く者へと変えられます。